

## 求菩提の天狗の話

今日は「天狗小僧寅吉」の話をして聞かせようかのう。その昔、人間の世界と天狗の世界とを自由に行ったり来たりすることができたという若者の話じゃ。

昔々のこと、豊前のある村に、寅吉という少年が住んでおった。寅吉は、幼いころから、未来をピタリと予言したり、失せ物がどこにあるのかをちゃんと言い当てたりする不思議な力の持ち主じゃったそうなの。

その寅吉が七歳の時のことじゃ。村の鎮守様のお祭の日に、神社の境内で店を開いている一人の山伏が目にとまった。山伏は

「めまい、立ちくらみ、頭痛、腹痛、熱さまし、何にでも効くみょう薬はいらんかえ。」

その大声で鳴るように言いながら、直径三寸ばかりの小さなつぼの中から練りかためた丸い薬を取り出して、売っておった。寅吉はそれをしばらくながめておったが、夕暮れ時になって人通りがと絶えてしまうと、たまがったことに、山ぶしはあたりに置いてあつた商売道具をみんなそのつぼの中へ納め、あげくのはてには、つぼに足をかける

と自分の身体までもその中にスッポリ入れてしまった。そして、つぼは空高くまい上がり、どこかへ飛んでいってしまつたんじゃ。

寅吉は、それから何度かその山伏が薬を売る姿を見かけたが、そのたびにすべてをのみこんだつぼが空を飛ぶというあの不思議な光景に出会つた。そんなある日、薬売りを終えた山伏が、帰り際に寅吉に声



をかけてきて、

「おい、おまえもこのつぼの中に入れ、面白いものを見せてやる。」

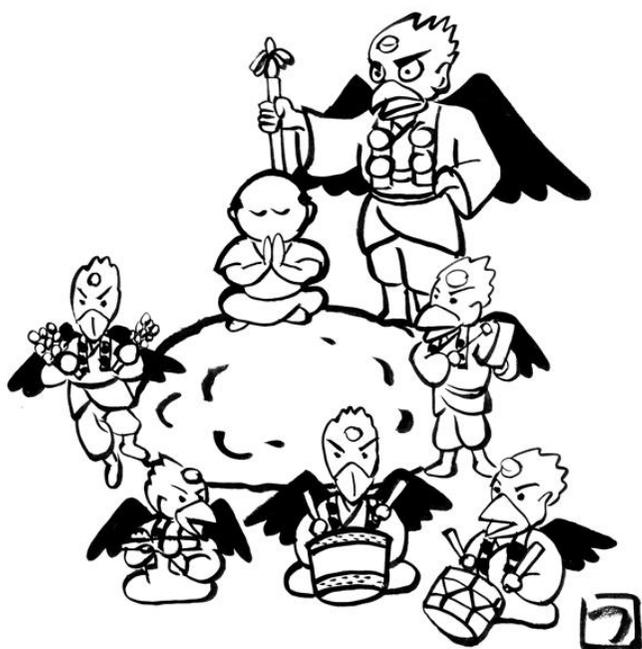
と言っのじゃった。どうしたものかとずいぶん迷ったが、寅吉はどうとう山ぶしのさそいにつてみることにした。言われたとおりスルスルとつぼの中に入りこむと、たちまちつぼは空中にまい上がり、寅吉は求菩提の山のおく深くへと連れて行かれた。

けれども、まだまだ幼い子どものことじゃ。夜になると、寅吉は急におとうやおつかあがこいしゅうなつて、しく泣き出してしまった。それを見た山伏は、

「またわしに会いたくなつたら、あの鎮守の森に来るがよい。わしの持っている神通力をおまえに教えてやることにしよう。だが、このことを家の者に決してしゃべってはならぬぞ。」  
と言つて、寅吉を背負い、大空を飛んで、家まで送り届けてくれたそう。

ところで、この山伏の正体は、求菩提山にすむ八天狗の一人で、次郎坊という名の天狗じゃった。次郎坊はいつもは山伏の姿をしていて、その手や足は人間と同じじゃったが、顔は犬のようでもあり、カラスやタカのようなようでもあった。またよく見ると、背中には左右に羽根がはえていて、自由に空を飛ぶことができたといつことじゃ。

寅吉が次郎坊から聞いた話によれば、天狗にもいろいろあつて、おく山で自然に生まれでた天狗もいれば、鳥やけものが歳をとつて天狗になったものもある。また人間が死んで後に天狗になったりもするといつことじゃ。そして、どつやら求菩提の天狗たちは、ある晩



流れ星になつて、星の世界から地上に降りてきたカラス天狗ということらしい。

その昔、源義経がまだ牛若丸と呼ばれていたころに、京都の鞍馬山の天狗から武芸を習つたそうじゃが、それと同じように、寅吉も次郎坊天狗に導かれて、あれやこれやと不思議な体験をし、天狗がもっている神通力とやらを学んだ。

天狗の神通力はさまざまじゃけれど、求菩提のカラス天狗は昔から「火伏の神」、つまり火をしずめる神様として人々から敬われておつた。火をしずめるのはとりもなおさず水じゃ。だから、天狗は水の神様だと言つてもいい、

天狗はその力で火事を消し止めるだけではなくて、雨を降らせようと思えば、思いのままに雲を呼び、雨を降らせることもできたわけじゃ。

寅吉が天狗の世界に出入りしていた、ちようどそのころ、求菩提山のふもとの村々では、夏の間長いこと雨が降らずカンカン照りが続いて、田畑は干上がつてしまい、お百姓たちはたいそう困りはてておつた。そこで、寅吉は次郎坊にせひにとたのみこんで、雨ごいの術を教へてもらつたことにしたそうな。

厳しい修行の末にやつと雨を降らせる術を覚えた寅吉は、ある日、求菩提の天狗たちと連れ立って、挟間の千手観音堂の裏山へと出かけて行つた。そして、山のてっぺんにドッカと座っている大きな岩の上に立つた寅吉は、村を見おろし、大きくひとつ深呼吸をすると、両手を合わせてじゆ文を唱え始めた。

「オン マユラ キランテイ ソワカ オン バロダヤ ソワカ 干ばつに雨を得、疾病火災の難を除き、天下泰平・五穀豊穰の祈願ともなるべし。」



木造八天狗像

やがていつしよにやつてきた天狗たちが笛を吹き、太こやかねをにぎやかに打ち鳴らし始めると、寅吉はそのおはやしに合わせて、天狗の雨ごいのまいをまってみせた。パイヒヤラドンドン、パイヒヤラドンドン……。

するとどうしたことが、辺り一面みるみるきりにおおわれ、それまでジリジリと照りつけていたおてんとつさまは姿をかくし、上空に黒い雲が呼び寄せられて、お百姓たちが待ちに待った雨が、それも大つぶの雨がドツと降りだし、田畑をうるおしたということじゃ。

今も挟間の観音堂の裏山には「天狗岩」と呼ばれる大きな岩があり、また村に子どもたちが白しようぞくの山ぶし姿でまう「天狗拍子」というおどりが伝わつちよるのも、寅吉や求菩提の天狗たちの雨を呼びのりから始まったことかも知れんのう。

さて、寅吉は、自分がんばって雨を降らせていねの実りを助け、村の人たちを喜ばせることができ、満足じゃった。人のために役に立ったということがこのほかうれしかった。寅吉は次郎坊に心から感謝をし、厚くお礼を言つて人間の世界にもどつてきたそうじゃ。

もちろん、その後も、自分が天狗の世界を行き来し神通力を教わったことはだれにもしやべらんじゃったが、寅吉には天狗の住んじよるあの求菩提山が他の何よりも大切なものに思えてならんじゃった。

寅吉だけじゃなくて、わしらにとつても求菩提は宝物じゃ。これから先、わしらも求菩提の山や森を大事にしていかねばならんのう。「天狗小僧寅吉」の話は、このへんでおしまいじゃ。